

上野殿御返事

弘安三年七月二日 五九歳

去ぬる六月十五日のげざん^{見参}悦び入って候。さてはかうぬし等が事、いま^抱でか^抱へを
かせ給ひて候事ありがたくをばへ候。たゞし、ないないは法華経を^{内内}あだませ給ふにては
候へども、うへには^{上他}たの事によせて事かづけ、にくまる^憎かのゆへに、あつわらのもの
に事をよせて、かし^{彼処}ここ^{此処}をもせかれ候こそ候めれ。さればとて上に事をよせてせかれ
候はんに、御もち^用候はずば、物をばへぬ人にならせ給ふべし。をかせ給ひて^悪あしかり
ぬべきやうにて候わば、しばらくかうぬし等をばこれへと^仰をほせ候べし。めこ^妻なんどは
それに候ともよも御たづねは候はじ。事のしづまるまでそれに^置をかせ給ひて候わば、よ
ろしく候ひなんとをばへ候。

よ^世のなか上につけ下によせて、なげきこそを^多く候へ。よにある人々をばよ^世になき人
々は^{雉鷹}きじのたかを^{餓鬼}みがきの^{びしゃもん}毘沙門をたのしむがごとく候へども、たかは^鷹わしにつかまれ
^{修羅}びしゃもんはすらにせめらる。そのやうに当時日本国のたのしき人々は、蒙古国の事を^聞き
ては、ひつじ^羊の虎の声を聞くがごとし。また筑紫へ^赴おもむきていとをし^妻きめをはなれ
子^見をみぬは、皮をはぎ、肉をやぶるがごとくにこそ候らめ。いわうや、かの国よりおし
よせなば、蛇の口のかえる、は^包う^丁ち^師やうしが^姐ま^鯉ない^鮒たにをけるこ^{むりょうこう}あふなのごとくこそお
もはれ候らめ。今生はさておきぬ。命^消きえなば^測一^住百^住三十六の地獄に墮ちて無^量劫^経ふべ
し。我等は法華経をたのみまいらせて候へば、あさき^測ふちに魚の^住すむが、天くもりて雨
のふらんとするを、魚のよろこぶがごとし。

しばらくの苦こそ候とも、ついには^業たのしかるべし。国王の一人の太子のごとし、い
かでか位につかざらんとおぼしめし候へ。恐々謹言。

弘安三年七月二日

日 蓮 花 押

上野殿御返事

人にしらせずして、ひそかにをほせ候べし。